クラス番号	622	担当教員名	原田　正樹
テーマ	地域福祉システムの構築と地域住民の参加　ー地域自立生活支援のあり方をめぐってー		
著書･論文 研究課題等	『社協の底力ー伊賀市社協ー』、『福祉２１ビーナスプランの挑戦ー長野県茅野市ー』中央法規 『共に生きること　共に学びあうこと』大学図書出版　など フィールド：茅野市（長野県）、氷見市（富山県）、伊賀市（三重県）、半田市（愛知県）、浦添市（沖縄県）、名古屋市昭和区などの地域福祉計画や実践に長く関わる。全国社会福祉協議会・ボランティア市民活動振興センター運営委員や学会理事などの社会的活動を行う。		

ゼミナール概要

キーワード：地域福祉、福祉教育、ボランティア・ＮＰＯ、参加と協働

＜私の問題意識として＞

私自身は学生時代から障害者の自立生活運動に関わってきました。大学卒業後は重度障害者療護施設に勤務していたこともあります。自分のなかでは「障害とは何か」を考え続けてきたように思います。その根底には「優生思想と当事者性」という課題がありました。私が障害者運動のなかで突きつけられた言葉のひとつに、「共に生きるとは、ともに行き倒れになっても生き抜くことである」というものがあります。その覚悟がないものが、軽々にノーマライゼーションなどと口にしてはいけないと言われ続けてきました。このことをきちんと地域に対して発信していくこと。 地域福祉とは決して予定調和的になされるものではありません。ときには排除したり抑圧する場も地域なのです。こうした地域のなかで生じる様々な葛藤や対立、それをどのようにとらえ、その課題解決に向けてソーシャルワーカーがどのようにかかわっていくことができるのか。地域住民が、生涯学習の視点から福祉教育の展開が重要だと思います。このような地域福祉の価値を問いながら、地域における福祉・保健・医療・生涯学習をトータルなシステムとしてとらえ、「0～100 歳の地域包括ケア」の構築に地域住民がどう参画していくのかについて、地域福祉実践を通して検討していきたいと思っています。

＜ゼミのねらい＞

ゼミでは３つの力をつけていきたいと考えています。

①自分のことばで考え、表現できる力をつけること

借り物の概念（よくわからない専門用語など）を疑い、自分のことばとして使えるようにします。レポートや卒論、プレゼンテーション、ディベートなどを通して論理の方法を学び、自己表現できる力をつけていきます。とくに卒論は原稿用紙で 300 枚以上は書き上げます。（過去 5 年間の卒論は平均 327 枚）

②仲間と問題を解決できる力（共同研究できる力）をつけること

ゼミではグループ報告を重視します。ひとつの課題について納得いくまで調べたり、議論して、合意形成をしていきます。前期はグループによる共同研究をして、ゼミレポートを作成します。

③現場から学ぶ姿勢を身につけること

できるだけ地域福祉実践が展開されている「渦」のなかに身をおいて考えてみたいと思います。リアリティがないところで、地域福祉の息吹を感じることはできません。そこで私がこれまでかかわっているフィールド（例えば茅野市、氷見市、伊賀市、昭和区など）に足を運び、いろいろな体験を通して学習していきます。

＜ゼミの進め方＞

前期は 3、4 年生合同でフィールドワークや共同研究を通して、地域福祉に対して基礎的な理解を図るとともに、問題意識を広げます。３年生の後期からは、ディベートやプレゼンテーションを通して自分の考え方をまとめていきます。４年生は一年間かけて自分自身が納得できる卒論を完成させていきます。この他に夏の合宿、各種セミナー等への参加、各地域へのフィールドワークなども取り入れています。また４年生では社会福祉専門実習を通してコミュニティソーシャルワークの力をつけていきます。

社会福祉士の国家試験対策は、ゼミの時間として特別な対策は行いません。受験希望者を中心に、自主勉強会を組織して準備していきます。それでも合格率は高いです。専門性とは利用者に認められてこそ、はじめて役立つものです。試験対策ではなく、ソーシャルワーカーとして必要な力をしっかりつけてください。

担当教員からのメッセージ

人とのかかわりが好きであること。おいしいものをおいしく食べ、楽しいことを多いに楽しみ、悩むべきことをとことん悩む、そんなゼミにしたいものです。

原田ゼミは先輩･後輩のつながりを大事にします。卒業生との交流もよくあります。みんなが異口同音に言うのは、「卒論指導が厳しい」ことです。今、書く自信がなくても構いません。必ず書けるようになりますから。ただ卒論を書く気持ち、つまり情熱ややる気、そして問題意識がないと大変かもしれません。一緒にゼミを作り上げていきましょう。熱意のある学生を期待しています。